



口での奉仕を終えた後、赤緒には一切の休みも与えられなかった。
すぐに身体を抱えられ、対面座位の姿勢をとらされ、そのまま挿入される。
何度も味わった感覚、しかし少しも慣れる事はない屈辱の感覚。
ハマドが腰を打ち上げる度に、赤緒の大きく美しい胸が強く弾む。



ぐぐ

ぐぐ

ぐぐ

ぐぐ

あぐ

あぐ

あぐ

あぐ



弾む赤緒の胸。飛び散る汗。
ハマドはそれを鷲掴みにし、先端を
頬張る。
痺れるような感覚が赤緒を襲う。
手で激しく柔乳を揉みしだきながら
ハマドはその先端を強く啜る。
容赦のないハマドの責めに、赤緒は
ただ悲鳴をあげる。
その吐息に熱を帯びながら……









悲鳴はやがて熱い喘ぎとなった。
赤緒はいつの間にかハマドの舌使いを
求め、胸を差し出していた。
心はまだ屈していない。
だが赤緒の身体はもうハマドの虜となっ
ていた。
いつ終わるかもわからない時間。
赤緒の心が墮ちるのも時間の問題だ…